

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26420610

研究課題名(和文) 自律性と多様性を保証する学童保育施設の生活空間計画研究

研究課題名(英文) Research for living space planning of after school childcare facilities to ensure autonomy and diversity of behaviors

研究代表者

清水 肇 (SHIMIZU, Hajime)

琉球大学・工学部・教授

研究者番号：40244280

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：学童保育施設の空間構成の原則を得るため、子ども一人一人を識別した観察調査と分析に継続して取り組み、子どもの過ごし方の差異のパターンと空間構成の対応関係についての知見を得た。教室転用施設、段階的空間構成を持つ民間住宅転用施設とプレファブ利用施設における屋内外の過ごし方調査、さらに少人数で過ごす領域を付加する実験前後の過ごし方調査を行い、[定型][不定型][一人]の行為と過ごし方パターンの存在を見出し、それをもとにした多種の領域を持つ空間構成原則を示した。

研究成果の概要(英文)：According to a series of observation survey of children's behaviors in after school child care facilities to find a theory of space composition planning, a pattern of variety of behaviors of children and relation between the patterns of behaviors and space composition was found.

Surveys were held in a facility converted from a school classroom, those converted from residences and a temporary structure. During the surveys additional experiments to add small territories in facilities were carried out.

Patterns of behaviors are explained as "stylized", "non-stylized" and "sole". Principles of space composition planning with various territories are proposed.

研究分野：建築計画 地域生活空間計画

キーワード：学童保育 学童保育施設 子ども 過ごし方 空間構成

1. 研究開始当初の背景

学童保育施設は、共働き世帯等の生活を支える役割とともに、子どもにとって重要な生活の場であるが、法制化と制度の整備が遅れたため、施設の数と内容、運営体制、保育の内容において多くの課題があるものと指摘されている。

施設についての課題は、特に研究開始当時、一人当たり面積基準の施行が明確に行われておらず過密状態が存在したとともに、利用可能な施設の制約および施設の空間構成の原則の不在のため、密度、空間構成両面に問題のある事例が多数みられた。この状況は、研究期間後半の新制度への移行や厚労省が示した運営指針などによって改善も行われたが施設空間構成については依然として課題が残っている。

建築計画学分野においては、(1)実態調査にもとづく機能論的提案、(2)運営者の評価に基づく面積水準の提案、などの成果がみられたが、子どもの過ごし方自体を詳細に掘り下げた研究が充分でない。とりわけ、無名の行為や過渡的行為など、機能論的に評価されにくい行為や過ごし方、個人の特性についての把握が行われていないため、施設空間に多様な場所を確保する根拠が得られていない。

そのために個々の子どもの過ごし方の詳細調査および分析の方法を開発し、過ごし方の傾向やパターンを個別かつ集団としてとらえ、空間構成との関係を明らかにすることで、施設計画の原則を得ることが重要であると考へた。

2. 研究の目的

研究の目的は以下のとおりである。

- (1)沖縄県内の学童保育施設を対象として、子ども達の実際の過ごし方の詳細観察調査を行い、個々の子どもの行為を時間の連続の中でとらえ、子どもの過ごし方の特性を個人差の広がりの中で説明できるようにする。
- (2)行為の実態と施設の空間条件(空間構成および利用密度)との関係を分析し整理する。
- (3)上記の成果の進展を受けて、学童保育施設の空間構成の原則を示す。

3. 研究の方法

研究の基本的な方法は以下の通りである。

- (1)沖縄県内の学童保育施設において複数の施設空間および保育の実態に関わる条件のもとでの子どもの過ごし方の観察調査を行い、過ごし方の実態の詳細を分析する。
- (2)過ごし方と空間条件との関係を分析し、空間条件が過ごし方に与える影響について分析する。
- (3)以上の分析に基づいて、自律性と多様性を保証する空間条件についての知見を導く。

具体的には以下の方法で研究は進行した。過ごし方観察調査は、原則として10分あるいは5分間隔で、調査範囲での子どもの過ごし方全部を記録し個人別に場所(図面上に記

録)、時刻、行為、一緒に過ごしている人のデータを得るものである。

①2012年度に実施した一室型学童保育施設(S学童クラブ)における過ごし方調査(2012年11月、12月、計11日、95回、延べ633行為)の観察データの整理と分析を2013年~14年度まで継続した。過ごし方の傾向のパターンの分析、過ごし方と空間構成の関係についての分析を行った。

②2015年度には、庭に複数の領域を有する民家活用型の学童保育施設の2事例を対象とした過ごし方調査を実施した(学童クラブWで9月~12月計12日65回、M学童クラブで3月計9日56回)。過ごし方の傾向のパターンの分析、両施設における各領域と過ごし方パターンとの関係の分析を行った。

③2016年度には、M学童クラブでの前回調査を踏まえて、空間に小さな変化を与えて前後の過ごし方を比較分析する研究方法を考案し、実施した。M学童保育では民家の周囲の軒下の小領域の活用が課題と考へられたため、縁台とベンチを設置し、前後の観察調査を実施した(2016年10月~2017年3月、設置前に計8日76回、設置後に計9日97回)。

④2017年度には、前年度の調査結果の分析を続行するとともに、空間に小さな変化を与える実験を伴う観察調査の方法を検討し、プレファブ形式で比較的単調な空間条件の民家型施設のG学童クラブで、木製の台状の家具(「一畳ロフト」)を室内に導入し、設置前後の過ごし方の変化をとらえる観察調査を行った(2017年11月~2018年1月、設置前に計11日171回、設置後に計12日183回)。小さな領域を付加することにより、その空間で新たに生まれる過ごし方をとらえるとともに、小さな領域に関わる子どもの過ごし方の特性について分析を行った。

⑤2017年度には、以上の調査結果の分析を踏まえて、子どもの過ごし方のパターンの整理と、過ごし方に対応した空間構成のあり方についてのまとめを行った。

4. 研究成果

(1)コーナーのある一室型施設での過ごし方

2012年(助成研究期間前)に実施した一室型学童保育施設(S学童クラブ)の既存調査データの分析を2015年度まで継続し、以下の成果を得た。

調査対象施設は小学校内の余裕教室を転用したもので、一室の大空間の中に大きな広間空間と小さな「たまり」を複数設けている。この空間条件の中で子どもの行為の特性を見出し、空間構成との関係を分析した。この調査では屋外での行動範囲が広く把握が困難であったため、屋内での過ごし方に限定した調査と分析となった。

行為の種類を、座った行為(「座」)と動く行為(「動」)に大別し、一緒に過ごしている人数と合わせて各々の子どもの過ごし方を集計したところ、図1のような個人差が確認

された。

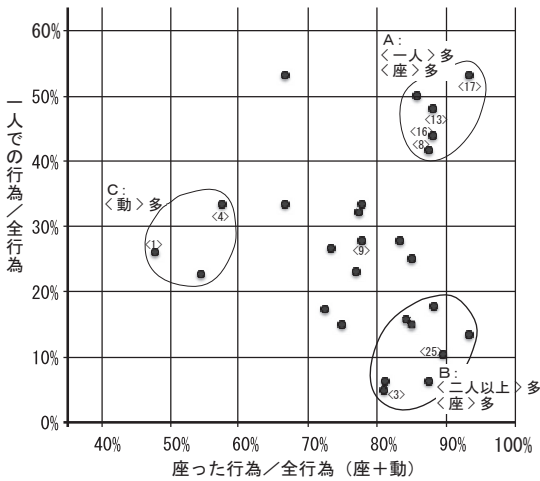


図1 個人別の過ごし方の相違の分布

特徴的なパターンとして、A（「一人」と「座」が多い）、B（「二人以上」と「座」が多い）、C（「動」が多い）の3つの傾向にグラフ内で分かれた分布が見られ、さらにそれらの中間のグループが見出される。

A（「一人」多、「座」多）は広間で行われる多人数の行為に対して、その周辺、あるいは一定の距離を取って一人で過ごす行為が多く見られる。

B（「二人以上」多、「座」多）は広間での多人数での学習や遊びが過ごし方の中心であるが、時に小コーナーを使った4名以上の行為も見られた。

C（「動」多）は、屋内の広い範囲での動く遊びや「ウロウロ」「移動」が多く見られた。

この分析により、行為の種類と一緒に過ごす人数の個人差が大きいことが確認され、多様な過ごし方に対応した施設計画の必要性についての基本認識を得ることができた。一緒に過ごす人数は空間構成に対応しているが、大空間に多人数、小空間に少人数というパターンだけでなく、大空間内の余地で集団に近接して一人で過ごすパターンや小空間に大人数で入り込むパターンも含めて空間利用のバリエーションをとらえることができた。

この段階では、屋外での過ごし方を含めたトータルな把握ができておらず、さらに異なった空間構成の事例を含めた調査の蓄積の必要性が確認された。

(2) 屋内外に複数の領域を有する施設での過ごし方

前調査においては一室を家具で仕切って領域をつくっている屋内に限定した調査であったが、関係者との調整により二つの民家型学童保育施設の屋内外における過ごし方調査を2015年度に実施した。

学童クラブWは、RC造平屋建ての民家で庭が比較的広く、集団遊びが可能な広場+道の

エリアと樹木が多く手作りの木製の「きち」がつくられた「木陰エリア」を有している。M学童クラブは、RC造平屋建ての民家で広場と道での集団遊びが可能であるとともに、建物周囲の軒下に小さな領域を持っている。

両施設において観察調査を実施した。前回のS学童クラブでの調査内容を再検討し、集団活動および学習を観察と分析の対象からはずし、自由な行為選択が行われている状況にしぼった記録と分析を行った。

各々の空間での行為は空間の特性と対応している。屋外の大きな空間では大人数の動的遊びが行われ、屋内でも比較的大きい部屋では集団での遊びから少人数、一人での遊びまでが行われる。比較的小さい部屋では少人数、一人での行為が多い。屋外の小さな領域のあるゾーン（Gの「木陰」、Mの「軒下」）において特定の少人数グループによって多様な行為が行われていることが見出された。

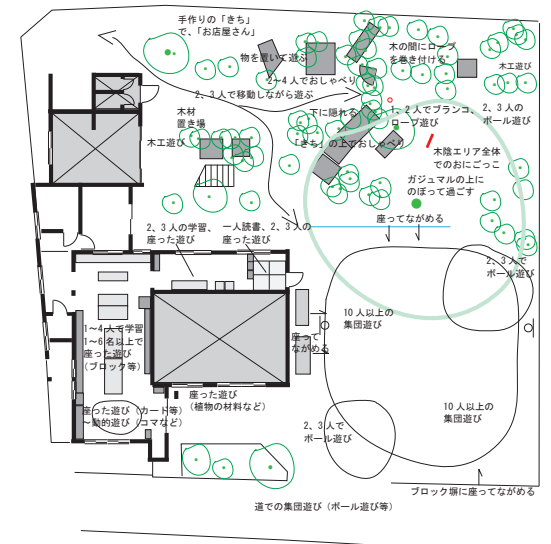


図2 場所ごとの行為の特徴 (学童クラブW)

三種類の空間の選び方には個々の子どもで大きな個人差があり (図3)、多様な領域を持つことの意味が確認された。

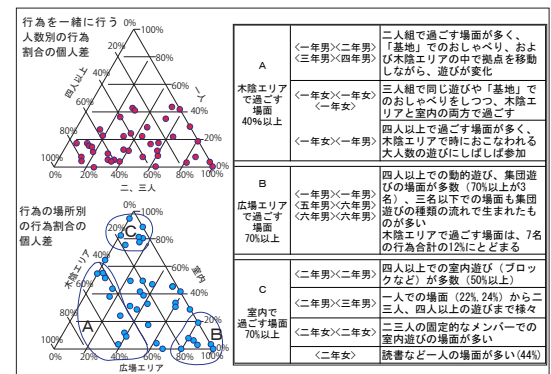


図3 過ごし方の個人差 (学童クラブW)

(3) 空間の小改変実験と過ごし方の変化 (1) 当初の研究計画では、観察調査を重ねるこ

とで学童保育施設の空間構成に関わる原則を抽出し、それらをもとに学童保育施設の目標像を描く予定であった。実態調査を重ね、学童保育関係者との検討を行う中で、建築レベルでの大きな変化が困難であっても、設置物や家具などの付置によって空間の小改変が可能であり、その効果を検証することで空間改善の意義を明確にするという研究方法の着想を得ることができた。

第一段階として前回調査での学童クラブWとM学童クラブの空間利用の相違にヒントを得た。Wにおいては「木陰エリア」の樹木や「さち」が少人数での過ごし方の重要な場所となっている。一方のMでも軒下エリアにおいて少人数で過ごす様子を確認することができたが、落ち着いて滞留できる条件が不足していると思われた。

そこで、2016年度は、縁台、ベンチ、テーブルを屋外に設置し、その設置前後の過ごし方を比較するための観察調査をM学童クラブで再び実施した。

この調査データの分析過程で、改めて子どもの過ごし方を理解するための論理的枠組みを深めることができた。

各々の行為の目的・対象を①自分自身の内面・身体、②他者とのふれ合い、③物・環境の3つがあると考えると、三つ各々の目的・対象に特化した遊び等の行為があるとともに、多くの行為が三者の複合として説明される。

三つの目的・対象への重点の置き方に個人差があるという解釈ができ、そこから過ごし方のパターンをとらえることができた。

A（遊び契機）：三つの対象が複合する定まった遊びの形（例えば集団ボール遊び）が多数を占める子どもは、多人数での特定の遊びを比較的長く継続する。遊びの種類は継続し遊び相手は入れ替わることもあるが集団は安定して持続する。

B（仲間契機）：2～4名の特定の少人数グループでの遊びを継続する。時に場所や遊びの種類を変えながらも、特定の相手と過ごすことを継続する。

C（一人）：他者から隠れた場所で過ごす場合と、他者が見える程度で適宜離れた場所で「ウロウロする」「眺める」などして過ごす。

上記のA、B、Cのいずれかが特に多い子どもを見出すことができる。

Aの例として、広場や道でビー玉、ボール遊び等を集団で長時間継続し、多人数集団の中でほとんどの時間を過ごす子どもが見られる。Bは2～4名の同じ組み合わせで、人形遊び、製作遊び、会話などのいくつかの遊び、過ごし方を流れの中で行う。場所は小さな部屋の中が多く「設置」後の縁台やベンチも使用された。Cは他から離れた場所の場合もあるが、他の子どもの近くの隙間的な場所にいる場面がしばしば見られる。

A、B、C各々の過ごし方には典型的なパ

ターンがあるが、AとBには中間的なものも考えられる。その個人差は行為の傾向を示すグラフの中で、A（道・広場エリア、四人以上が多い）、B（軒下エリア、二、三人が多い）、C（一人が多い）の各傾向として読み取ることが可能である。

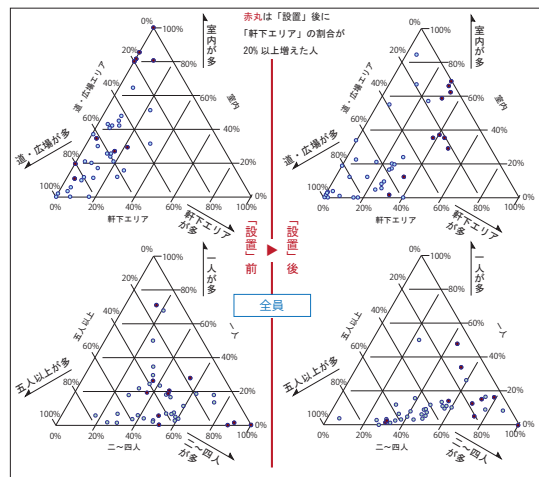


図4 過ごし方の個人差 (M学童クラブ)

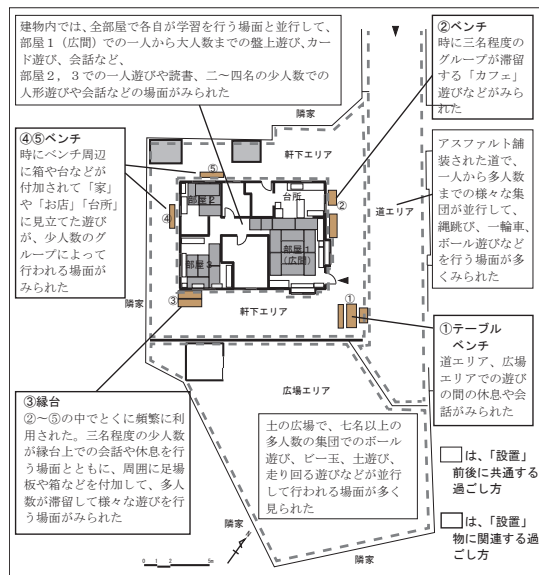


図5 場所ごとの行為の特徴と「設置」後の変化

A（遊び契機）は遊びと空間の関係が明確であり、集団による特定の遊びが一定時間継続する広場や道で過ごす。室内の盤上遊びやカード遊びも同様である。

B（仲間契機）は、少人数集団が一定の区分された領域を持ってその場で可能な遊びを見つけて行う。「設置」前は奥の小部屋において人形遊びが連続して行われたが、この少人数グループが「設置」後には、ベンチや縁台で他の遊びやおしゃべり等を行う場面が見られるようになった。これによって、このグループの過ごし方がB（仲間契機）であったことが再認識された。

C（一人）は、他者のいない部屋に行く場合もあるが、多くは集団の動きの近くで一定

の距離にいて眺める、ウロウロする、一人での遊びを行う。全域の中の余白において行われる過ごし方である。

縁台等の「設置」はB（仲間契機）の過ごし方のための新しい拠点を増やした事になったと説明できる。

(4) 空間の小改変実験と過ごし方の変化 (2)

M学童クラブでの空間の小改変実験に続いて、小さな領域付加の試みと調査を2017年度に実施した。調査対象のG学童クラブは平屋建てプレファブの一室に小スペースが付加されたつくりである。屋外の広がりも制約されており、全体として単調な空間であることに対して付加できるものの可能性を関係者とともに検討した。

ここで発案したものは木製の台状の家具（「一畳ロフト」と称する）で、大部屋にあって高さの変化と周囲から一定区分された領域を与えることを意図した。

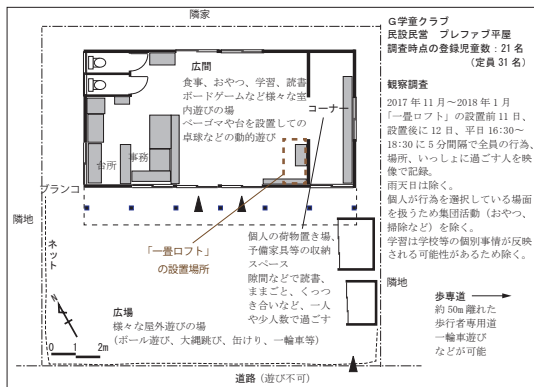


図6 G学童クラブの調査概要



図7 「一畳ロフト」

「一畳ロフト」の設置前と設置後に観察調査を行った。

調査結果の分析にあたり、行為のとらえ方を再検討し、以下の区分でとらえることとした。

〔一人〕：一人での行為（読書、休憩、人形遊び、工作等）、他者から一定の距離を取る行為（集団を眺める、隠れる等）、他者との関わり方が定まらない行為（ウロウロする）。

二人以上の行為を以下の二つに分類した。

〔定型〕：型の定まった行為。名前とルールの明確な遊び（スポーツ、各種ボール遊び、鬼ごっこ）、道具を使うことで遊び方が定まる遊び（各種ボードゲーム、剣玉、ペーゴマ）等。

〔不定型〕：相対的に行為の型が定まらないか、ゆるやかな行為。大まかなルールのもとで変化しながら行われる遊び（ままごと、ごっこ遊び、追いかっこ、チャンバラ）、制約のゆるやかな道具遊び（積み木、おはじき、ビー玉遊び）、場所にはたらきかける遊び（基地づくり等）、ふれ合い（おしゃべり、甘える、じゃれ合う、騒ぐ）等。

前項の「遊び契機」が〔定型〕、「仲間契機」は〔不定型〕な過ごし方に現れている可能性が高いと考えられる。

全行為を個人別に集計して割合をみると、個人差がみられる。

〔不定型〕が少ないA、〔不定型〕がやや多く〔一人〕が少ないB、〔不定型〕と〔一人〕がやや多いCに分けた。

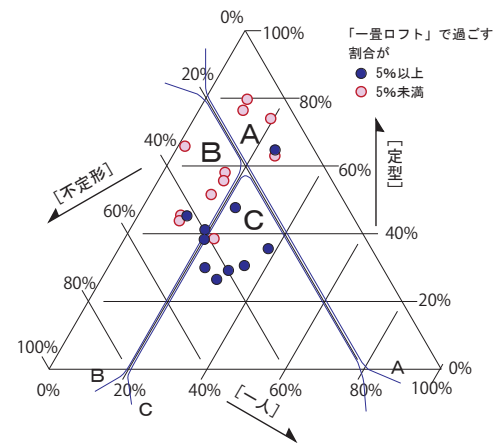


図8 過ごし方のパターン

Aは多くの時間を広間や屋外で同種の遊びを連続して行う過ごし方である。その際の遊び仲間も同じグループであることが多い。コーナーと「一畳ロフト」にいる場面はほぼ見られない。

Bは〔不定型〕がやや多い。過ごし方は仲間グループでのおしゃべり、集団で騒ぐ、支援員とおしゃべりなどのふれ合いを経てボール遊び、鬼ごっこなどに移る流れが見られた。コーナーと「一畳ロフト」にいる場面は少ない。

Cは〔不定型〕と〔一人〕がやや多く、遊び方では、ままごと、秘密基地づくりなどが見られる。一人での行為は、絵、工作、折り紙、大人数の遊びの周囲をウロウロする、眺めるなどである。いっしょに過ごす仲間が不特定であったり、少数の特定の仲間と過ごす、あるいは一人が多く4名以上の大人数に加わらない場面が多い。コーナーと「一畳ロフト」にいる場面がもっとも多い。

「一畳ロフト」で過ごす割合が高いのは主にCの過ごし方の子どもの達である。コーナー

での行為が移行したと思われるものと、コーナーでの行為にさらに「一畳ロフト」で過ごす場面が加わった子どもがみられる。

広間との視線、音は連続しているものの、高さの差があるために動作が交わらない場所を選び、遊び方、集団との関わり方をコントロールしていると考えられる。

(5) 結論 1 : 過ごし方のとらえ方

既往研究において、多種の行為・遊びの分類や整理が行われてきた。建築計画学をはじめとする施設研究では空間的要件との関係から、動きの外見を「動的」「静的」などの区分でとらえるものが多い。一方で発達心理学での幼児の遊びは社会性の獲得の過程として他者との関わり方から説明する理論がある。

一連の調査を通じて行為・遊びのとらえ方の方法を発展させることができた。行為の見かけ上の特徴と他者との関わり方の双方に着目し、この二つの視点を統合することで、子ども一人一人の過ごし方のパターンの違いが説明できるようになった。

2017 年度調査で提起した [定型] [不定型]

[一人] は他者との関わり方と行為の種類を組み合わせが重要であることを示している。

[定型] の行為は既に共有されている遊び方や過ごし方のパターンが構成されており、その方法で一定時間、ある程度固定された特定の集団が過ごすパターンである。この過ごし方が多い子どもの中には、学童保育での生活の時間のほとんどを同じ遊び方、集団で継続する場合も多く見られる。

[不定型] の行為は、他者と一緒に過ごすことを軸として行為や遊びが選択される。ルールがゆるやかであるために、遊び方の始まり方や終わり方が明確でなかったり、偶然性を持って行為が移り変わっていく。集団はほとんどメンバーの固定された二人、三人組の場合と、中心メンバーが固定されながらも適宜参加者が合流、離脱するものもある。

[一人] の行為は、集団から切り離された場所で過ごす場合も少数見られるが、集団のいる場所の周辺の余地にいて集団で行っていることが見聞きできる場所で一人読書、眺める、ウロウロする、一人でできる遊びをする、などの方が多く見られる。[一人] から [不定型] への合流、離脱も行われる。

一人一人の三種の行為の割合は異なっており、大きな個人差が見られる。

(6) 結論 2 : 学童保育施設の空間構成の原則

三種の行為の保証を目標とすることで、学童保育施設の空間構成原則が明確となる。

[定型] の行為は、行為の種類ごとに必要な空間が定まる。広場や広間が確保されることで、大人数から少人数の [定型] 行為の場所を確保することができる。特に屋外の広場を設けることで、屋内での [定型] の集団遊びの密度を緩和することができる。

[不定型] の行為は、集団が場所を選んで遊び方・行為を選択していく。少人数集団の領域となりえるような空間的まとまりが求められる。[不定型] 行為の集団が複数並行して動く可能性があるため、小さな領域を複数設置することが必要である。領域は内部空間においては周囲との区切りがつけられた空間であり、屋外では家具の設置も領域づくりとなる。

[一人] の行為は [定型] [不定型] に使われていない空間に入るとともに [定型] [不定型] に使われている空間の余地で行われることが多い。比較的后者の場面が多く現れる。[不定型] のための小さな領域の確保は [一人] の空間にもなる。[定型] [不定型] の行為が空間を埋め尽くさず、一定の余地が残ることが重要である。

以上の空間の組み合わせで表現される空間構成原則は、従来の機能的空間モデルの提示と異なり、行為および子どもの関係構築の場の条件であり、学童保育関係者とイメージを共有する上で有効なものとなる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1) 清水肇、学童保育施設における過ごし方の多様性と空間構成 コーナーのある一室型施設における過ごし方の事例検討、日本建築学会計画系論文集、査読有、vol. 722、2016 年、pp. 811-819、

DOI <http://doi.org/10.3130/ai.ja.81.811>

[学会発表] (計 5 件)

1) 清水肇、学童保育施設における屋外空間の小改変による過ごし方の変化 民家活用事例における少人数領域の付加実験、日本建築学会大会、2017 年 9 月 2 日、広島市

2) 清水肇、学童保育施設における個々の子どもの過ごし方に着目した施設空間計画論の試み、日本学童保育学会 第 8 回研究大会、2017 年 6 月 11 日、北九州市

3) 清水肇、学童保育施設の屋内、屋外を通じた過ごし方の多様性と空間構成 庭に複数の領域を有する民家活用事例の分析、日本建築学会大会、2016 年 8 月 24 日、福岡市

4) 清水肇、学童保育施設における子どもの過ごし方の多様性と空間構成 : コーナーを有する一室型施設における生活行為、日本建築学会大会、2015 年 9 月 6 日、平塚市

5) 清水肇、学童保育施設における子どもの生活行為の特性と空間構成との関係、日本建築学会大会、2014 年 9 月 12 日、神戸市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 肇 (SHIMIZU, Hajime)

琉球大学・工学部・教授

研究者番号 : 40244280